

# シリーズ「グローバル・ジャスティス」 第26回

## 戦後の沖縄本島にみる沖縄地元民と米軍関係者の人的交流：「コンタクト・ゾーン」を契機として

# Christopher Ames

### メリーランド大学准教授

第二次大戦終結後、今日に至るまで、アメリカ合衆国は沖縄本島の2割を基地として占有しており、これに対する反対運動の様相は、研究と報道の対象として注目され続けている。その一方で、米軍基地内で生活する人々と沖縄の地域社会に暮らす人々との、日常レベルでの交流については、十分な調査・研究がなされてきたとはいえない。1945年から67年間に渡り、アメリカ国民と沖縄県民は、共に働き、遊び、恋をし、婚姻を通じて家族となり、時には政治的に対立し、また協力しあいながら、互いの文化的交流を深めてきた。このセミナーでは、構造的に不均衡な力関係のもとでの文化交流を読み解く鍵となる「コンタクトゾーン」（プラット）の概念を用いて、米軍基地関係者と沖縄の人々との日常レベルでの人間関係が、歴史的、社会的、経済的なコンテキストからどのような影響を受けて変容してきたかについて、1990年代以降に注目して報告する。

2007年にミシガン大学人類学研究科を卒業後、メリーランド大学で講師を経て准教授(現職)。国際基督教大学行政研究科において、「平和と暴力の人類学」、埼玉大学において「アメリカ外交史」、「日米外交史(演習)」を非常勤講師として担当している。近著に、“Friends in Need: Operation Tomodachi and the Politics of Disaster Relief in the Developed World”(2012, In J. Kingston (Ed.) Tsunami: Aftershocks and Fallout from Japan's 3/11. Nissan Institute/Routledge: London.)、「アメラジアン・スクール：多文化共生への課題」(印刷中、田中雅一編著「コンタクトゾーンと人文学」晃洋書房)など。ペンシルバニア州出身。

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科では、連続セミナー「グローバル・ジャスティス」を開催いたします。このセミナーは、現代世界が直面するさまざまな課題における「ジャスティス」の問題を、講師が自らの視点で語っていくものです。したがって、どのような視角で、何を問題としてジャスティスを論じるかは講師にゆだね、主催者は一切の方向性をあらかじめ規定いたしません。ジャスティス(正義)という言葉のもつ多義性や問題性もふくめて、多様な議論の場として提供していくものです。

日時：5月7日(月)

18:30-20:00

会場：博遠館 307 番教室

来聴歓迎・予約不要

同志社大学  
グローバル・スタディーズ研究科

tel. 075-251-3930

e-mail. [ji-gs@mail.doshisha.ac.jp](mailto:ji-gs@mail.doshisha.ac.jp)